

# よりあいつうしん

## 21号

発行元

よりあいの森  
つうしん課

〒814-0104  
福岡市城南区別府  
7丁目9-22  
☎092-845-0707

### 当たり前にあった、ありのままの最期の時間を守りたい

11月5日、篤さんは、息子さんと二人の娘さんに見守られながら、穏やかに息を引き取られました。享年92歳でした。2020年、コロナウイルスが猛威を奮いました。テレビでは、コロナ禍のため、家族でさえも最期の時間に立ち会うことができなかつたというドキュメンタリー番組が放送されていました。そこでは、大きな後悔を背負ってしまった家族の思いが赤裸々に語られていました。

病院、施設では、免疫力が十分でない方、持病を抱えた方、病気の治療中の方々が在籍しているため、感染に対する危機管理は、より強い制限のもと行われることは致し方ないことなのかもしれません。

また、全国の介護施設には、今現在も厚労省より「緊急かつやむを得ない場合」を除き、面会には制限を設けるよう指示が出されております。そのため、多くの施設では、窓越しや衝立越し、はたまたオンラインでしか会うことができないのが現状です。

自分達は容易に「制限」をできる立場にあります。お年寄りや、家族のことを考慮し、感染予防の観点で制限せざるを得ない場面も確かにあります。

では、「看取り」においてはどうすれば良いのでしょうか？

家族に自由に入ったりしてもらいながら、看取りを支援することとは、「感染」という大きなリスクを背負うことかもしれません。しかし、お年寄りとその家族にとっての一度きりの最期の時間と、家族とともに過ごしたいという声なき思いを、感染対策の名の基に制限してしまうことには強い違和感がありました。そして、あのドキュメンタリーのような後悔しかなかった実践はしてはいけなくとも感じていました。

自分達はある意味、腹をくくりました。感染対策に気を抜くことなく、これまで通り、家族とともに「看取り」をしていきたい。

今回は、コロナ禍における看取りの体験談を、田口篤さんの息子さんの厚意で書いて頂くことができました。ご家族から見た、よりあいの森での看取りの様子をみなさんにも読んでいただければ幸いです。

# コロナ禍での看取り



2020年11月に父が、「よりあいの森」で息を引き取りました。最期の時間を子供たちと共に過ごせたことは、父と私たちにとって、本当に貴重な思い出となりました。

最期を迎える時間が近づくにつれて、呼吸や脈拍等が不安定になり心配な状況の中、よりあいの職員さん達から対応方法を教えてもらったことで、穏やかな気持ちで最期まで付き添うことができました。

私は、遠方に住んでいるため、想う気持ちはあれど、なかなか会いに行くことも出来ず、地元福岡に住んでいる姉と妹に任せっきりになっていました。

父が息を引き取る一週間くらい前に、職員さんから、「これまでの様子から、今、会っておいた方がよいのでは」と提案があり、コロナ禍ではありましたが、父の元へ向かうことにしました。そして、父が息を引き取る前々日に「よりあいの森」に到着しました。それから二日間、ベッドの横で過ごし、今まで父に話をしたことがなかった子供の頃の思い出や父への想いをたくさん語りかけました。その時間は本当に幸せでした。

最期は、子供たちと、スタッフの皆さんが見守るなか、それまでとろんとしていた目を「ぐっ」と見開いた後、息を引き取りました。その直後、喉の奥に絡まっていたと思われる痰が口から溢れ出てきたことに驚きました。

その時の感情は、悲しさよりも「よくがんばったね！今までありがとう！」の気持ちの方が強かったのを覚えています。

駆けつけていた病院の先生の死亡確認が終わり、しばらくすると、「お風呂に入りましょう！」の声。一瞬、「えっ！？お風呂に？誰を？」と思いましたが、父のことだと分かり、びっくりました。職員の皆さんと一緒に父とお風呂に入り、髪を剃ったり、身体を洗ったり、写真を撮ったり、和気あいあいとした時間が流れました。まさか息を引き取った父とお風呂に入ることができるとは考えてもいませんでした。さっぱりとした父をベッドに横にして、生前に興味で彫った沢山の能面を布団の上に並べました。自作の能面に囲まれ、絶対喜んでくれたことと思います。

その夜は、大勢の方が父の元にかけてくれました。皆さんから、父のよりあいでのエピソードを聞くと「沢山の方に支えられていたんだなあ」と感謝の気持ちで胸が熱くなりました。母も5年前に第二よりあいで看取っていただきました。父も母も、よりあいで穏やかに充実した老後をごすごすことができたと思います。また、家族にも、たくさんの思い出をいただきました。感謝の気持ちから職員さん達の益々の活躍を祈っております。

「父の看取りに立ち会って」



「ご家族との絆を感じた看取り」

田口さんは、ここ数カ月、食も細くなり眠る時間が増えていました。そんな田口さんの過ごし方について、職員達と度々話し合いをしていました。

ある職員は、体力のあるうちに掛けておきたいと言っていて、思い出の場所を巡りました。また、天気の良い日はデッキで食事して、よく食べたおみんなど喜び合いました。娘さんが差し入れてくれた梨を、若い職員が食べやすいようにと工夫してゼリーにして食べてもらいました。

残された時間が少ないと見て取れた時、家族との時間を少しでも作りたいと、娘さん達ともに出かけました。職員達は、それぞれの考えと思いついた田口さんを中心とした関わり（実践）に結びつけていました。

いよいよ何も口にできなくなった田口さんのお部屋に、11月1日から娘さんと息子さんは泊まり始めました。昼間には、時々大きな笑い声がお部屋から聞こえていました。娘さんからは、息子さんが田口さんの側で思い出話をしてる様子を撮った動画を見せてもらいました。動画の中で田口さんはしっかりと目を開けて息子さんの話を聞いていました。それから寿命を迎えるまでの5日間、娘さんと息子さんは交代しながら、ずっと田口さんの側で過ごされました。

最期が差し迫った時、娘さん2人が田口さんの手を握り、息子さんは頭を撫でながら「お父さん、ありがとう。」とよく頑張ったね。「と声をかけていました。そして、子供達3人に囲まれる中、田口さんは穏やかに最期の一呼吸を終えました。私はその場に立ち会うことができず、本当によかったと、心から思いました。

田口さんの看取りは、ご家族との強い絆を感じるものでした。間近でご家族と過ごす時間を見せてもらえたことで、田口さんが子供達と育んできた大事な足跡のようなものに触れることができたような気がしています。

コロナ禍の中で気を遣いながらの看取り実践となりましたが、思い切ったご家族と共に関わっていく選択をして本当に良かったと感じています。コロナウイルスの今後は未だ不透明ではありますが、「制限」ありきではなく、目の前のお年寄り、ご家族とともに、その都度悩みなが関わっていききたいです。

田口 修



よりあいの森  
日隈 留美

# 「あの日の私は赤ちゃん？」

よりあいの森  
上村 遥奈

私はよりあいの森に就職してもうすぐ1年になります。これは、そんな私が経験した、ある夜の洋子さんのお話です。  
洋子さんは、普段はとてとても愛らしく素敵な方なのですが、感情の波が激しいこともある、気まぐれで魅力的なおばあちゃんです。

夜勤中の午前0時頃、洋子さんのお部屋の方から、何やら気配を感じました。様子を見に行ってみると、ヨロヨロと立ち上がり、今にも転びそうな足取りで歩き出しているところでした。お手洗いだろうか？と近付き、手を取るも、その足は広間の方へと向かいます。

何がしたいのか？見当もつかなかった私は、お茶やお菓子を出してみたり、一緒にゆつくりと座ってみたりと…その時思いつく限りのことを試してみましたが、何だかムスツとしていきます。そんな時間が流れていくうちに大きなあくびを一回、二回されました。

そうか…眠たかったのか？と布団に案内してみましたが、すぐに広間に戻って来られます。何度か布団と広間を行き来しているうちに、段々とご機嫌の雲行きが怪しくなってきました。そこで、ここはとことん付き合ってみよう！と思い、お布団を広間に敷いてヒヤヒヤしながら一緒に寝てみるという作戦を決定しました。

すると、寝転がった私を見て洋子さんの態度が一変しました。優しく微笑み、顔を撫でまわし、体をポンポンと叩き始めたのです。

私は何が起こっているのか理解できないまま、寝たふりを続けていましたが、洋子さんの様子は一向に変わりません。  
「おくよしよし」「いい子ね〜」…ん？これは…私が寝かしつけられているのでしょうか？試しに体を起こしてみようとすると「はいはい、寝ときなさい」とピシヤリです。  
この状況が何となく面白くなってきた私は、パチッと目を開けてみたり、柔らかいほつぺたをつんつんしたりとふざけてみました。洋

# 介護1年生

## 奮闘記

看護学校卒業後、1度は看護師として病院に就職するも、半年で見切りをつけ介護の世界に飛び込んできた。  
お年寄りワールドにとっぷりつかれる彼女は、「今」をお年寄りと過ごし、その世界を想像し、時には同じ景色を眺め、まさに奮闘している。これは、そんな彼女が経験した、お年寄り記録である。



子さんの包容力に包まれた私は、なんだか赤ちゃんになった気分になったのでした。

すると突然「こらー！いい加減寝んねー！！」と叱られました。いやいや、そもそも私は夜勤中なのです。自分が仕事であったことを思い出し、急に我に返った私は、頃合いを見て、そーっとその場を離れると眠気の限界がきた洋子さんはパタッと眠ってしまいました。  
あの時の洋子さんは、寝かしつける素振りから私を娘さんと思いついていたのかな？とも思いましたが、遠くに向って娘さんの名前を呼んでもいませんでした。

今考えてもよくわかりませんが、洋子さんはあの時、確かに私を赤ちゃんと思って寝かしつけてくれていました。あの瞬間の私は、洋子さんにとっては赤ちゃんだったのです。

病院勤務から、よりあいの森に職場を変えて、戸惑い悩むことも多くありますが、医療の現場では体験できない日々を送る事ができています。お年寄りの前では、私は曖昧な存在で、時に仲良く、時に揉み合いながら、お互いの暮らしの一部となっています。

あの日の夜、洋子さんの赤ちゃんになった私は、今日も誰かにとっての何者かになっているのでしょうか。

# 宅老所よりあい

## 「送迎日誌」

宅老所よりあい

堀 正晴



一人暮らしのAさんのお迎えに行く前には電話をするようにしている。この一本の電話から始まるエピソードは、私たちが大切にしていることがたくさん詰まっているように思う。

Aさん「はい。Aでございます」

職員「おはようございます。よりあいの〇〇です。今からお迎えに伺いますので、準備して下さい」

Aさん「あー今日はちょっとフラフラするから行くの止めようと思って」

職員「本当ですか。心配なので様子を見に伺います」

Aさん「そう？じゃ待ってます」

電話を切り、送迎に向かうその職員は、車の中でこれから繰り広げられる戦いの作戦を練り始める。

家に着き、インターホンを押すとパジャマ姿のAさんが出てきた。

職員「Aさんおはようございます。調子はどうですか？」

Aさん「おはようございます。今日はフラフラするから行けない。今から寝ようと思っています」

電話の様子から予想した通りのAさんである。しかしここで引き下がりはしない。

職員「少し上がってもいいですか？心配です」

Aさん「熱は無いから大丈夫よ。まあせっかくな来てくれたからお茶でもどうぞ」

そう言うって家の上がらせてくれたAさんの表情は、行くのがただ面倒なだけに見える。

職員「朝ごはん食べました？」

Aさん「今日はまだ食べてないなあ。お昼と一緒でいい」

職員「よりあいにお昼ご飯用意しますから食べに行きましょうよ。」

Aさん「いや今日はもう行けません。フラフラします」

職員「ご飯だけでも食べに行きましょうよ。食べた後、家に送りますのでその後ゆっくり休んだらどうですか？」

Aさん「そうやなあ。でもご飯だけ食べに行くのも厚かましいし」

職員「そんなことないですよ。もう準備しますよ。みんなで食べた方が美味しいですよ」

30分後…

Aさん「今日はもう寝た方がいー」

職員「フラフラしているなら一人でいるよりもみんなと一緒にいた方が安心ですよ。ご飯を食べたら元気も出るかもしれないですよ」

1時間後…

Aさん「いや寝るのが一番いい」

職員「ご飯も食べないで一人で寝ていたらみんな心配しますよ」

そんなやり取りを繰り返していると不意にその時が訪れる場合がある。

Aさん「あーもう今日はあんたに負けた。行くのうかなあ」

職員「ありがとうございます。では準備して行きましょう」

車に乗ってよりあいに向かうAさんの表情は先程とは打って変わって明るくなっている。まるで最初から出かけるのを楽しみにしていたかのようだ。

# 「私たちが大切にしていること」

私たちは一人のお年寄りにゆつくり付き合うことを大切にしています。それはお年寄りの気持ちを最優先にしたいという思いがあるからです。「行きたくない」と言われるお年寄りを強引に連れて行くことは絶対にしたくありません。かといって、そこで諦めていては、そのお年寄りが必要とする支援は受けられないままになってしまいます。

では、私たちにできることは何があるのでしょうか。それはお年寄りの気持ちが変わるのを、ただひたすら待つしかないと思っています。

お迎えに行った時に、なかなか来てくれないお年寄りもいらつやいます。その時は時間をかけて関わり続けてみます。もちろん、気持ちが変わらない日もあります。本当に行きたくないのだと感じればその日は諦めます。

粘って粘ってそれでもダメで家を後にする時のやるせない気持ち、一人でよりあいに戻った時の気まずい気持ちは言うまでもありません。

そんな押し引きを繰り返しながら少しずつ関係を深めていくようにしています。最初はなかなか来てくれなかったAさんも、よりあいに来られる日が増えてきました。電話をすると「準備しとくね」と言われ、バッチリ準備されていることもあります。

そんな日が毎日続いてほしいなあと思いつつも、この長いやり取りもまた、一つの楽しみになっている私達がいいます。

# 編集後記

次号より編集長は、宅老所よりあい職員の「堀」へバトンタッチいたします。

つうしんを通して何を「発信する」ことができるのか、そればかりを模索してきました。そこには、私たちの実践と、そこから見えたお年寄りの姿が常にありました。

そして、「コロナ禍だからこそ「つうしん」を通じて、みなさんとの繋がりをより一層感じることができました。

今後もゆつくりとしたペースの発行ではありますが、何卒よろしくお願ひ致します。

ありがとうございました。

よりあいの森

鐘ヶ江 亮一